

渡辺克己著



第二十六章・津留かいわい



第二十六章 ● 津留かいわい

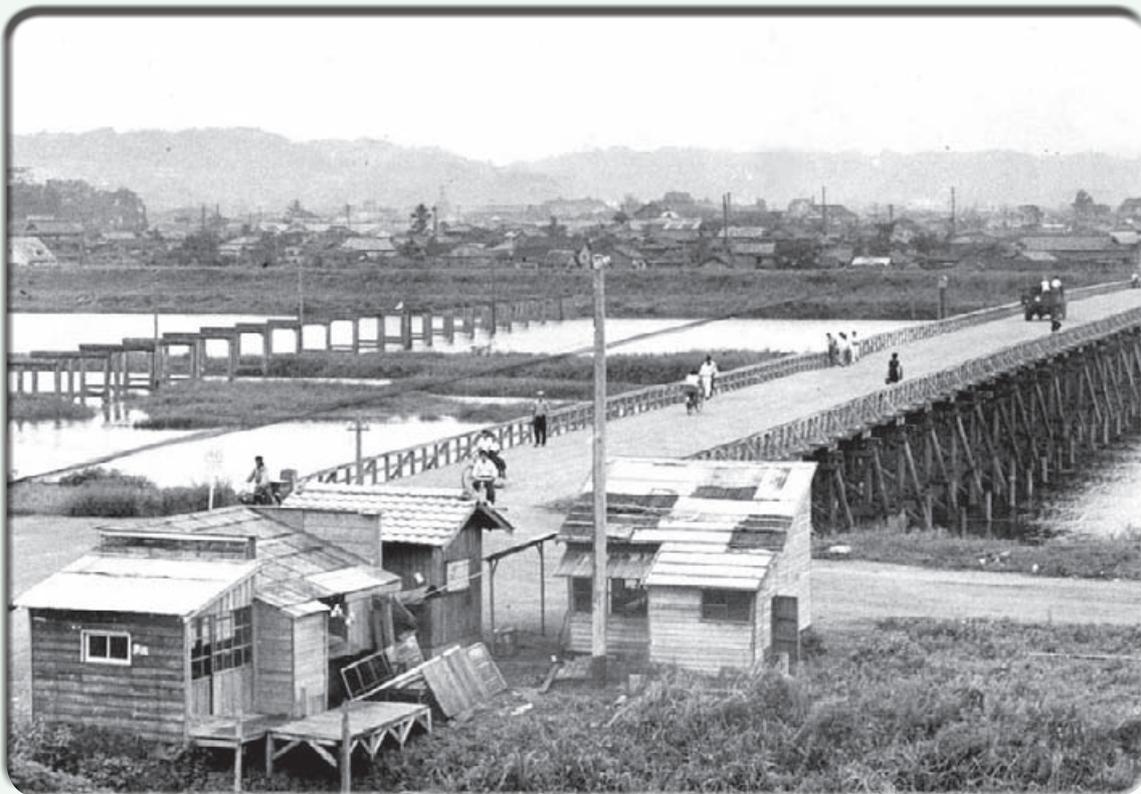
【写真】戦時中に架けた舞鶴橋、昭和二十六（一九五二）年。中央の黒い線が新橋の架け替え位置。

- ・ 甚吉地蔵の大イチョウ
- ・ 小大名無残
- ・ 燃えたムクの木
- ・ 津留のカラス
- ・ 港・花津留
- ・ 個人で水田づくり
- ・ 水田化も水のアワ
- ・ 軍用地から文教地へ

奥付け／デジタルブックについて

発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



戦時中に架けた舞鶴橋、昭和 26(1951) 年。中央の黒い線が新橋の架け替え位置。

甚吉地蔵の大イチョウ

舞鶴橋を渡って東にのびる国道は、いま車のはんらんで、両側に建ち並んだ商社の新しい看板が、終日ほこりをかぶっている。この道路が二級国道 大分―佐伯線として整備されたのはつい近年。もともとこの路線は、愛媛県道として、明治九年に大分―佐賀関間の開通に始まったものである。その旧道は、いまも国道の南裏側にあり、表通りのけん騷をそ知らぬ顔で昔ながらの静けさを保っている。

いまの舞鶴橋のちよつと上手に、津留橋と呼ぶ木造の長い橋がかかっている。長浜神社前の通りと、この津留の旧道を結んでいたのである。明治、大正年間、この長い橋が大分の名所の一つとなっていたものとみえ、当時の大分名所絵はがきにも加えられていた。あの絵はがきは、和装の婦人が日がさをさして渡っている場面だった。

橋を渡って津留の道路にはいつてゆくと、中津留にかかったあたりの右側に、大きなムクの巨木があり、その下に石のほこらがまつてあった。さらにもつと行くと、左側にイチョウの巨木が数本枝を茂らせ、その奥に「首なし地蔵」または「身代わり地蔵」「甚吉地蔵」といわれるお地蔵さまを安置した地蔵堂がある。このムクやイチョウの木は遠くからも望まれ、一つの目じるしであり、通行者のいこいの場でもあった。荷を運ぶ人たちは車をとめ、行商人は肩の荷をおろして、イチョウの根方でいっぷくしているのをよく見かけたものであった。

萩原のこどもたちは、別に貧しい家の子でなくとも、こづか

い銭かせぎに、夏はトコロテン売りに大分の町へ出かけたものだが、そのトコロテン売りのこどもたちは、まず、地藏堂のイチョウの下で涼を入れながら仲間を待ちあわせた。つぎに長浜神社の境内で全員の集合を終わって打ち合わせをし、それぞれ呼び声を流しながら町へ散っていくのが例だった。

あのトコロテン売りの呼び声は「テンヤー、トコロテン」。萩原の老人なら、たいていなつかしく思い出すだろう。あのイチョウの木は、いまも葉を茂らせ、緑のかげをつくっている。

首なし地藏のご本尊は、お堂の奥深くしまわれていて見ることはできないが、たしかに首がないそうさ。しかもその首は、熊本県南小国町の黒川温泉にまつてあるということである。

昔、萩原の貧しい家の子甚吉が、毎日塩売りに府内に行く途中、必ず塩をひとつまみお地藏さまにお供えしていた。この近くに武士がウリ畑を持っていた。甚吉は、病気の父にそのウリを食べさせたくて行商の帰途、やみにまぎれてウリをぬすんだ。畑主はウリがたびたびなくなるのに立腹、物かげにかくれていてウリドロボウを一刀のもとに切った。ところが、翌朝行ってみると、切ったのは人間ではなくお地藏さまの首だった。お地藏さまが甚吉の身代わりになってくれたのである。

いらいお地藏さまの信仰が高まった。ところが、津留を通りかかった修験者が、うわさを聞いて地藏の首をぬすみ出し、小国まで行ったら急に首が重くなって運べない。そこで、その地にうち捨てて去った。里人がその首をまつたら温泉がわき出した。これが黒川温泉である、という伝説。ほんとうに黒川温泉に首だけのお地藏さまをまつてあるそうさ。

小大名無残

中津留のムクの木と石のほこらは民家にはさまれたアキ地にいまもあるが、ムクの木は昔のものではない。

ここの字名は一本木、古老は「古宮」と呼んでいる。府内城主大給公が豊後に移封されたとき、中津留に六年間住んでいたが、そのさいここにあつた天満社を、居館の鬼門に当たる位置（いまの中津留公園のそば）に移して守護神とした。それで、もとの天満社あとを古宮と呼んだのである。

丹波の亀山城主であつた十八歳の大給忠昭が、なぜ豊後に移封されたか、その事情は明らかでない。忠昭が和歌をたしなみ、京都の公卿の家に出入りするのを幕府にうとまれたといわれているが、実情は亀山城を五万石台に格上げするため、二万二千余石の少年城主を他に転じさせたのだろうと史家はいつている。

忠昭は最初亀川に居館を置いたが、ここにいること一年余、何かの事情で急に中津留に引越した。寛永十二年十二月二十七日、年の瀬もせまったあわただしさの中に、家臣千人あまりを引きつれ、準備も何もできていないところにやってきたのだからたいへんだ。庄屋の家をあけさせて、そこを城主の仮の住まいとし、おもだつた家臣もそれぞれ民家をあけさせてはいつた。残りのものにはわか作りの小屋すまいだ。庄屋たちも小屋掛けの越年だつた。

この庄屋、橋本家は大正ごろまで正月の雑煮の中に、引きのべだんごを入れるならわしを守っていたそうだ。殿さまがあわただしく引き移ってきたので、モチをつく暇もなく正月を迎え、

殿さまにさしあげる雑煮に入れるモチがないので、引きのべだんごでごしんぼう願った。いらい庄屋の家では、雑煮に引きのべだんごを入れる家風となったのだということである。

忠昭は中津留に居館を新築して六年間住んでいた。いまの大分放送のある一帯は「城の内」という字名がついている。これが居館のあとを伝える唯一のものだ。

忠昭は中津留の次に日岡の高松に移転し、ここに十六年間住み、四十二歳の年によく府内城転封となった。二十四年ぶりにやっと城持ち大名に復活したわけである。力の乏しい小大名は幕府組織の中では無残であったのだ。

大給家のぼだい所の浄安寺と、きとう（祈祷）所の福寿院は、亀山城からついてきた寺で、居館の移転のたびについて回っている。中津留の地藏堂（首なし地藏）は、当時浄安寺境内にあったものだと伝えられている。高松には現在も浄安寺という寺がある。大給公が府内城に入るとき、浄安寺は十六年の歳月で信徒のできた高松を去りがたく、そのまま居残ったものらしい。府内の方は同慈寺を浄安寺として、新たにぼだい所としたのである。

燃えたムクの木

大給忠昭が亀川に移封された寛永十一年は、府内城主日根野吉明が下野国壬生城から府内に国替えになった年だ。忠昭が亀川にくる一週間前に吉明が府内にきている。

吉明は、忠昭の父の妹を妻にしているから、忠昭にとっては

義理のおじに当たる。年少者の忠昭を府内の近くに住ませたのはそういう関係を幕府で配慮したのかもしれない。

忠昭が中津留に居館を移したときには、すぐ近くの津守には松平忠直（一伯）が配流の身の憂うつな歳月を送っていたのだ。転々と居を移させられている漂泊の小大名となりさがった忠昭は、一伯の身の上に、どのような感慨をもって、津守の空を望んだことだろうか。

一伯の方は幕府派遣の監検使や、府内藩主吉明の嚴重な監視下にあるちつ居の身だし、忠昭自身も吉明から陰に陽に監督を受けていたことだろうか、ほんの目と鼻の間に住んでいても、まったくの没交渉。一伯が死んでも、うわさを聞いた程度だろう。豪商三弥長者が日根野吉明に無残な処刑にあったことなども、忠昭はついに耳にしなかったかもしれない。

やりての吉明が初瀬井路の開さくなど花やかな政治を後世に残しているのに、城東時代（津留、高松時代）の忠昭は二十数年間を、ただお家大事と、ひっそりと影のようになすごしていたのだ。「奥方や姫が、運動かたがた中津留天満社の近くの畑にイモ掘りなどに出かけてきた」という話が、庄屋だった橋本芳和さんの家に伝わっているぐらいのもの。

中津留天満社は、前にも書いたように、中津留居館の鬼門よけに移転新築して、忠昭寄進になるりっぱな神殿をもち、のち村社にまで社格をあげたのだが、太平洋戦争中、あのあたりは海軍航空隊基地となつて疎開を受け、中津留、花津留、今津留の三社を合併して今津留に同居させられた。戦後、花津留は、いち早く神社を持ち帰って神殿を再建したが、いちばん社格の

ある中津留天満社は、再建に奔走する有志がいなかったとみえ、現在津留小学校前の路地裏に、仮住まいのお粗末な姿をとどめている。

ところで中津留天満社の、最初の位置を示す由緒あるムクの巨木のことは前にもふれたが、このムクの巨木は、明治の末に火災にあつて枯死した。ムクの木のすぐそばの川辺クニさんの家から火を出し五むねを焼いたが、その火がムクの木に燃え移った。古木なので中がうつろになつていたとみえ、翌日まで十数メートルの上の方から盛んに火をふいて燃えつづけたそうである。

津留のカラス

中津留の旧道に、「染め物、洗い張り」の時代離れた古くさい看板をかけた店がある。津留かいわいで明治時代からのれんを続けているのは、この店だけだ。

明治年代に岡増太郎さんが開店し「オカマスの染め物屋」で通っていた。現在はオカマスの養子の多田忠彦老人があとを継いで、昔のままの店がまえを維持している。

津留一帯はもともと商売のなりたたないところだった。日用品でもなんでも、ちよいと大分まで足を伸ばせばことたりる。それに津留は馬車引きの多い土地だった。荷を運んでの帰りに、家のものから頼まれていた買い物をして、カラ車の中にひよいと放りこんでおけばいいのだ。

津留に馬車引きの多かつたのは耕作地が狭いからだ。明治の半

ばごろまでは、いまの飛行場付近までは塩田で、婦人は「塩かき」の労働に、男は大分の町から別府方面まで塩売りに出かけて日銭をかせいだ。その塩が専売局に取りあげられ、塩田も閉鎖されると、肥えくみと耕作に使っていた馬と車を利用して、荷物運搬の馬車引きに転向するのが、てっとり早い道だったのである。

とくに、明治の末までは、津留には水田というものがほとんどなかった。水田にしようにも引くべき水がないのだ。だから作るものはアワがおもで、ほかに麦やイモ。三度の食事はアワ飯が普通だった。一升のアワに一合の米をつなぎに入れてたけばいい方だ。そこで津留の農民はアワ飯食いを自ちよう（嘲）してこういつていた。

津留のカラスはスアワ、スアワと鳴いちよる

アワ飯を食って、馬車を引いて、その日暮らしをしていれば気も荒くなる。若い馬車引きはつい悪さもしたらしい。

たとえばこんなことがあった。数台の馬車がつながって町を歩いていると、向こうから人力車に乗ったべっぴんさんがやってくるとする。すると、先頭の馬車が「いよう、べっぴんッ」とばかり、道路を斜めに横ぎる。続く馬車も、これに応じて斜めに向きを変え、道路をふさいでしまう。こうしてしばらく車を止めて、立ち往生した人力車の車上の佳人をひやかすのだ。こんな、クモスケ的な行状は、さいさいあったらしい。

明治から大正にかけて、運搬機関としての馬車が全盛時代の話だ。もつとも、そんな悪ふざけも、ごく一部の者の稚気あふれる脱線にすぎなかった。ほとんどの人は純朴で働き者であっ

た。だいち耕作地に恵まれない貧しさを背負って、自分と家族の生活をかけているのだ。この馬車を引いていた人たちの中には、のちに土建業などで成功した人も少なくない。このような人たちは、仲間がバカ騒ぎをしている暇に、こつこつと飛躍への努力をしていたのである。

港・花津留

現在の鶴羽橋のちよつと下手に、元の橋のあとを示すコンクリートの橋脚が川中に並んでいる。つい数年前、橋脚の高い、幅の広い現在の橋ができたのだが、元の橋はどんな形だったか忘れてしまった。都市の膨張につれて町や道路や橋が年とともに形を変えていくが、変わったあと、元の姿を思い起こそうとしてもなかなか思い出せないものだ。絶えず前進している都市という生き物は、過去の忘却を早める作用をするものらしい。

裏川に橋がかかったのは明治九年に県道愛媛街道が開通したときだが、そのときの橋はもつと下手、現在もわずかに橋脚の棒ぐいが残っている。木橋なので、たびたび大水で流されたそう
うだ。

現在の橋のたもと付近は、大きな松が茂った松林で、土地の人は「かさ山」と呼んでいた。旧県道はこの「かさ山」の手前で左に折れ、松林にそってしばらく下って花津留地区にかかり、そこから木橋を渡って萩原にはいるのだった。

橋ができるまでは、むろん渡し船があったのだろうが、がんらい津留と萩原はそうひんばんな往復はなかったのだ。萩原か

ら府内の町に行くには、牧から下郡に道をとって、坊ヶ小路の渡しを渡っていたのである。いわば、津留は大分川の川中にくきた島のようなかたちで孤立していたわけである。

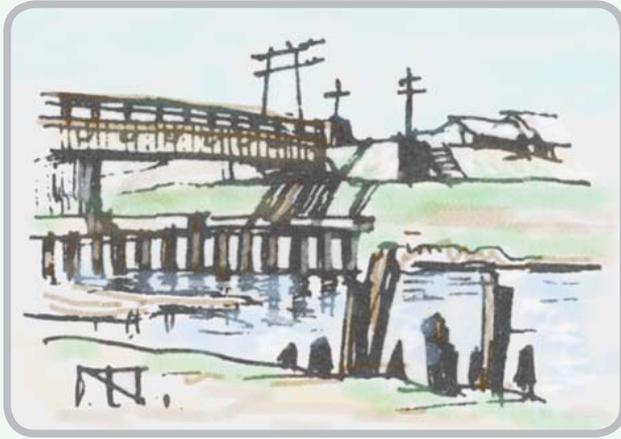
しかし津留は、塩田とアワ畑ばかりの寒村だったわけではない。明治十四年の大分県統計によると、裏川の花津留口に大小八隻の運船、今津留の下ノ川という入り江（大分川口付近か）に船問屋が一軒、小運船が三隻あったとある。

今津留の方は塩田に入れる燃料や塩の搬出をあつかっていたものだろうがそのあとをたずねるすべもない。花津留の方には、天神丸という船問屋や、吉野屋、松島屋などの荷受け問屋があったし、仲仕や船乗りを相手にする小さな煮売り屋も数軒あった。

花津留の墓地の近くに「白拍子」と呼ぶ小さな一角がある。

昔からこの土地を耕すと病人が出るといい伝えられ耕作をする者がいない。伝説もなにも残っていないが、花津留東の足立斧平さんの話では、先祖（松島屋）が掘ってみたら、石ビツのようなものがあつたといひ伝えられているそうである。

大友時代、古河公方足利入道三休という人が豊後に都落ちをして、宗麟



鶴羽橋（挿絵：田中昇）

のもとに寄ぐう（萬）し、津留に住居を与えられた。中津留の南方に「古ヶ鶴」（古河津留）という地名のあるところがその館あとだと伝えられている。（一説には古河公方足利三休は誤伝で、久我中納言三休が正しいという。三休の母は大友宗麟の女ともいわれる。そして桃園の高城山に館を築いて住んだとある。）そこであるいはこのような貴人についてきた白拍子の墓ではないかなど、空想をしてみるのだが、案外、花津留に上陸する船乗り相手の遊女の墓地だったのかもしれない。

しかし、ほんとうに石ビツがあつたとすれば津留の古い歴史を語るものだ。昔の人のことだからたたりを恐れて、石ビツはまだそのままそつとしてあるかもしれない。

個人で水田づくり

アワと麦とイモだけの、畑作地帯だった津留を、一挙に水田に改造したのは明治四十三年だった。しかもこの大きな仕事を、他にちよつと例をみない個人出資によるかんがい（灌漑）事業によって成功させたのだからおどろく。

明治水路が滝尾、牧、萩原、日岡一帯をうるおしたのは明治三十二年。この大事業を最初に請願した明治十三年の請願委員の中には、津留の戸長橋本九郎治を筆頭に堤金作、河野勇次郎、池辺群治、池永官治などが村を代表して参加している。水がほしいという悲願は他村と変わらなかつたのだ。しかしいよいよ実現をめざして水利組合を結成するだんになると津留は加盟を断念している。島同様の津留に水路を引くには、裏川をまたぐ

大工事をやらねばならない。そのばく大な負担金をかかえこめなかったのである。

しかし、相変わらず、津留のカラスはスアワ、スアワと鳴き、川向こうが満々と水をたたえた水田の喜びにひたっているのは、あきらめきれない。そこで地主たちが考えた。「だれか個人の出資で揚水事業をしてもらい、その水を買うということはどうか」ちよつとムシのいい考えだが、いい条件をみせれば話に乗る人があるかもしれないと、地主たちがその事業家をさがしてみることになった。そこに飛びこんできたのが新田梅太郎さんだった。

梅太郎さんは広島県呉市の人で、石灰製造業をもくろみ、明治四十二年に速見郡立石に視察にやってきた。そのとき「津留のアワ畑二百二十町歩に川の水を揚げて水田とし、一反歩三斗の玄米を報酬として受ける事業をやらないか」という話が持ちこまれた。成功すれば堅い事業なので、梅太郎さんは郷里の土地や山を売り払い、四万八千円の資金を持って津留に乗りこんだ。

この資金をもとに呉海軍から中古の百馬力のスチームエンジンを買い、大阪の鉄工所からポイラーやタービン二台など電気のない時代だから石炭による動力機を入れた。そして一時間一万石の揚水能力を持つ設備を、いまの岩田学園長の私宅のやや下手に完成した。また配水のために一町八反の土地を借りて水路本線を引いた。直接田に水を引く支線は地主負担である。

こうして完成してみると、実際に水田となる土地は最初の話の約半分百二十町歩だった。二百二十町歩は津留の総面積に近

い数字だったのだ。しかしその半分が水田化しただけでもたいしたものである。

ところが、いざ水を注いでみると、アワ畑はザルに水を入れるようなものだった。津留はだいたい大分川口にできたデルタ地帯だ。それに明治の中ごろまでは、いまの飛行場付近まで塩田だった土地だ。数年間は、こんな砂地との戦いに終始しなればならなかった。収穫があがらなければ報酬の玄米は約束どおり取れない。梅太郎さんはしばらく食うものもろくに食えない苦労をなめた。

こうした苦労の末、津留を見事な水田地帯としたのだった。順調な年は約千俵の玄米が水代として梅太郎さんのふところにはいった。しかし、どうかすると一俵の玄米も払えない小作人が多く、その人たちが玄米の代わりに入れる証文が大ゴウリ一ぱいたまっていたそうである。

水田化も水のアワ

旧県道を中心としてかたまっている今、中、花三津留の旧村落地帯を除いたほとんどの土地——いまの岩田町一帯はもとより、大分空港や、その周辺の団地地帯などは、揚水かんがい事業によってすべて水田と化していた。

本来なら、かんがい（灌漑）事業などというものは政府の補助のもとにやるべきものだ。それを新田梅太郎さん個人の事業として完成し、アワ畑を水田と化したのだから、梅太郎さんは、津留の農民にとっては恩人だ。

恩人といえ、この大仕事を完成させるために、揚水事業を誘致し、ムラの反対者を説得し、梅太郎さんの事業を守った、三重野幸太郎さん、河野駒太郎さん、田原要平さん、堤駒平さんなどという津留の先覚者もえらかった。

ことに河野駒太郎さんは、親分はだの人で「アワ畑から米をとれるようにしてやろうというのに、反対する者はおらんじやろう。どうだ。みんな賛成じゃな」と、ぽんぽんとタンカを切られると、反対者はウンともスンともいえなかった。

そこで、これらの功労者には、功労米として毎年玄米五俵ぐらいずつ、梅太郎さんの報酬米の中から出していたそうである。

ところが、戦争がこの人たちの苦心を水のアワにしてしまった。昭和十一年の秋、海軍航空隊基地を作るために津留の田畑をつぶすという話を持ちこまれた。当時まだ東大分村だった津留地帯はびっくりぎょうてん、緊急村議会を開いて対策を協議したりした。結局翌年、一反三百円ぐらいの値段で、舞鶴高校前付近から北方全部を麦の刈り入れがすむと同時に取りあげられ、荒々しい航空隊基地の工事が始まった。間もなくシナ事変に突入した。岩田町一帯の、津留南方まで軍用地にされ、航空機修理工場ができたのは、戦争がド口沼の様相を呈しはじめたころだ。結局津留はほとんどの耕作地をとりあげられてしまったのである。おまけに、戦争末期には相当数の民家が強制疎開を受けて土地を追われている。今津留附近の農家には南大分や滝尾に集団移住した人もある。

新田梅太郎さんも、航空隊がきたとき補償金をもらって揚水場を閉鎖した。そのさい小作人たちが玄米代わりに入れた借用

証を全部焼いたそうである。がんらい給水にたいする報酬は地主との契約になつていたので、地主が責任を負うべきものだが、その責任は小作米の中に含めて小作人に肩代わりをしていたのだ。

津留は草ぶきの家が多く火災がしょっちゅうあった。焼けられた小作人は、その年は梅太郎さんに納める玄米をかんべんしてもらい、代わりに借用証を一枚入れるといったような、気の毒な事情ばかりの証文だった。あとで取れる見込みはない。梅太郎さんはそれを知っているから、証文はコウリに放りこんだまま。そして事業閉鎖とともに灰にしてしまったのである。

梅太郎さんは数年前になくなり、むすこの良三さんが萩原に住んで新田農園を経営、いまメロンの温室栽培に精力を注いでいる。

軍用地から文教地へ

津留小学校が創立されたのは明治六年。大分県下の小学校の草分けである府内学校（現荷揚町校）が明治五年の創立だから津留校の創立は早い方だ。

高松学校（現日岡小学校）が福寿寺を仮校舎とし、最初「貧学校」と称して開校したのが明治五年で府内学校に続き、萩原学校が上西町の庵寺蓮性院（現牧太平氏宅）を借りて開校したのが明治七年。その他、山津学校（現桃園校）羽田学校（現滝尾校）白木、田浦学校（現神崎校）駄原、勢家学校（現春日町校）八幡学校などが明治八年、太田学校（現南大分校）が九年

という順序だから、だいたい東部地区の開校は他にさきがけて
いる。

もつとも中央に学制ができたのは明治五年六月、大分県小学校規則が公布されたのが六年十一月だから、府内学校、高松学校、津留学校は小学校規則に準拠したものではなかった。では、何によつたものかというところ、福沢諭吉が、明治五年の五月ごろ、中津の市学校を視察のため帰省した機会に、森下権令（知事）が大分に招いて、学校の組織、制度、経営などの立案指導を依頼した。諭吉は笠和町の塩屋長野善五郎さん方に滞在して「学校取建之記」を執筆した。これが大分県の学校の準則として公布されたといわれているから、創立の早い学校はすべてこれによつたものらしい。

津留学校創立の記録によると最初堤滝造さん宅（現舞鶴薬局の位置）を仮校舎にして創立し、その後橋本謙吉さん宅（現安本はき物店）に移し、明治十二年に三佐の同藩の倉庫だった建物を買って、現在の位置に持ってきて校舎としたとある。このときから津留小学校と称した。

この創立や校舎建築には、当時の戸長橋本九郎治さんが私財をさいてめんどうをみたという。九郎治さんが津留村、牧村を合わせて戸長をしていたためか、しばらくは牧村のこどもも津留学校に通学していたが、便利が悪かったとみえ十四年から萩原学校に移している。

太平洋戦争の末期（昭和二十年）空襲が激しくなり、すぐそばの海軍航空隊にドカンドカンと爆弾を落とされ始めたので、津留小学校は閉鎖し、津留のこどもは萩原の東大分小学校に移

した。そして戦後城東中学校が津留の校舎を利用して創立されたので、津留小学校はしばらく再開されないままだった。だから津留小学校の歴史は、戦後数年間とぎれている。

戦後、いちはやく津留に学舎の旗をかかげたのは岩田学園だった。荷揚町の校舎が空襲で全焼し、再建の地を海軍航空隊あとに求めたのである。あの一帯は焼けただれた鉄骨や、爆風で窓も屋根ガワラも吹きとんだ建て物などが、雑草の茂った中に痛ましい残がいをとどめていた。校長岩田正さんは、その荒りようとした残がいの中に住んで、新しい学園の設計図を描いたのだった。いま校舎をとりまく広大な住宅地を岩田町と称している。正さんはそこまでは考え及ばなかっただろう。

この岩田学園を露ばらいにして、いま津留地区は、舞鶴、商業、中央などの高校がいらかをつらね、文教地区に姿を変えてしまった。

海軍航空隊がきたばかりに、さんざんな目にあわされた津留は、戦後最も激しく平和地帯への変容をとげたわけだが、臨海工業地帯の造成で、さらに今後どのような変化をみせることか。

(注) ▽飛行場は青葉町の大洲総合運動公園の位置にあった。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第二十六章 ●津留かいわい

2008年2月8日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。